

1961年

「六〇年安保」の翌年にあたるこの年、わが国は池田内閣のもとで高度経済成長への助走が始まった。米・キューバが断交、ベルリンの壁構築など、東西対立の中で、中国と



中国の代表的な文化人により構成された中国文化交流友好代表団の来日は、学術、文学、演劇、美術など日本の文化界同士の連携を大きく促進した。中島健蔵理事長から歓迎のあいさつを受ける(左から)楚図南団長、崔泰山、周巍峙副団長、呉応健、張有萱、崔嵬、王守覚、常沙娜の諸氏

一九六一年十一月二十五日 椿山荘

ソ連はアルバニアをめぐる対立が激化。日中文化交流は前年に続き大きく発展した。特に、第一線で活躍している双方の多彩な文化界人士の往来は、その後の両国の文化交流の発展に大きな役割を果たした。中国の代表的文化人である巴金、謝冰心、楚図南らの戦後初の来日を実現した年である。



中国作家代表団は、東京でのアジア・アフリカ作家会議終了後、甲府の昇仙峡を遊覧した(右から)葉君健、劉徳有、林林、亀井勝一郎、劉白羽の諸氏

一九六二年四月九日

〇六一年の主な交流

- ◎1月 写真展「新劇俳優の見た中国」(主催、当協会、日本新劇俳優協会)、数寄屋橋・富士フオトサロンで開催。
- ◎3月 中国婦人代表団(許広平団長ら十四名)来日。当協会など三十団体の共同招請。アジア・アフリカ(A・A)作家会議東京大会参加中国代表団(巴金団長、劉白羽副団長、楊朔、林林、沙汀、謝冰心、李季、葉君健、韓北屏、李芒、呉学文、劉徳有、李森の諸氏)来日。
- ◎4月 舞踊家の花柳徳兵衛夫妻訪中。日本書道代表団(西川寧団長、松井如流副団長、大池晴嵐、手島右卿、宇野雪村、赤羽雲庭、宮本竹逕、梅舒適ら諸氏)訪中。
- ◎6月 日本作家代表団(江口渙団長ら十二名)訪中。日本作家代表団(亀井勝一郎団長、井上靖、平野謙、有吉佐和子、白土吾夫の諸氏)訪中、中国人民対外文化協会、中国作家協会の招請。
- ◎7月 世界宗教者平和会議・第七回原水爆禁止世界大会参加中国代表団(周培源団長、趙樸初副団長、朱子奇氏ら十三名)来日。
- ◎8月 訪中公演日本合唱団(井上頼豊団長ら二十七名、白土吾夫氏同行)訪中。
- ◎10月 中島健蔵理事長、白土吾夫氏訪中。「日中両国人民間の文化交流に関する共同声明」に調印、中国側署名者は楚図南会長。周而復、呉茂蓀、趙安博、林林、孫平化、郭芳為ら諸氏が同席。
- ◎11月 日本作家代表団(堀田善衛団長、中村光夫、椎名麟三、武田泰淳、木村菊男の諸氏)訪中。中国文化友好代表団(楚図南団長、周巍峙副団長、孫平化、張有萱、崔嵬、王守覚、常沙娜、崔泰山、呉応健の諸氏)来日。

責任という言葉には辞職、自決にまでつながる重い響きがある。語源を溯れば莊子に行き着くという。その軽々しく使えない言葉を逆手にとって無責任を謳歌する、と見せて実は責任というものを重視せよと警鐘を乱打する空気が生まれた。安保反対運動がひとつの山を越した一九六一年のことである。一九六一年六月、日本テレビでミュージック・バラエティー・ショー「シャボン玉ホリデー」が始まった。メンバーの中でも飛び切りいいかげんで変わった男という植木等の個性に話題が集中、番組の中で歌った「スーダラ節」は大ヒット。やがて植木を主人公とする、「無責任シリーズ」をはじめ多くの映画が生まれ一世を風靡した。無責任で世渡り上手な植木の描く個性こそ、高度成長期を批判するものと言えるだろう。

植木等の実像はきわめて謹厳で責任感が強く、反戦平和のために戦って治安維持法違反に問われた僧侶であった父を彷彿とさせるものがある。

植木等は一九八七年、戌井市郎、花柳芳次郎、本山可久子、藤田洋、清水邦夫らの諸氏とともに日本演劇家代表団の一員として訪中している。(九十九)



アジア・アフリカ作家会議東京大会には40カ国、60余名が出席した。中国代表団の巴金団長は、「すばらしい未来のために」と題して講演した各国代表の歓迎会で歓談する川端康成監事(右三)、巴金団長(左一)、楊朔(右一)、林林(右二)、韓慶愈(左二)の諸氏
——1961年4月27日 椿山荘



日中文化交流協会主催の中国文化友好代表団歓迎会で歓談する南原繁顧問(左)と朝永振一郎氏
——1961年11月27日 東京



木下順二氏(右一)、山本安英氏(右二)に、1960年の新劇訪中公演「夕鶴」の感動を語るアジア・アフリカ作家会議参加中国代表団で来日した謝冰心氏(左二)、沙汀氏(左一)
——1961年4月21日 椿山荘



文豪魯迅の夫人許広平氏を団長とする中国婦人代表団が来日 東京、盛岡、仙台など各地で熱烈な歓迎を受けた。仙台では青葉城の魯迅記念碑の除幕式に出席した。羽田空港のロビーで河崎なつ氏(左一)、内山マサノ氏(左三)らの歓迎を受ける許広平団長(右二)、黄甘英(右一)、郭建(左二)の諸氏ら一行
——1961年3月17日 東京



日本作家代表団が訪中 帰国後の報告会で、57年に続いて訪中した井上靖氏は、始皇帝、曹操など歴史上の人物の再評価が進められていることなどを話した。人民大会堂の前でくつろぐ(左から)井上靖、有吉佐和子、亀井勝一郎団長、平野謙の諸氏
——1961年7月



日本作家代表団堀田善衛団長は、訪中を前に「徹底した人民間の交流」を訴え、国交正常化したあかつきには、これは巨大な力を発揮する、と述べている。中国作家協会の茅盾主席(右二)、老舎氏(左二)と会見する堀田善衛団長(左三)、中村光夫(左一)、椎名麟三(右三)、武田泰淳(右一)の諸氏
——1961年11月 北京